

思いや願いを醸成し、気づきの質を高めるワークシートの工夫

～小学校第2学年の野菜の栽培に関わる単元において～

徳永 真衣^{*1}・藤上 真弓

A study of how to make a worksheet in Living Environment Studies
for Cultivating Wishes and Enhancing the Quality of Awareness:
A case of “Cultivation Activities” in the 2nd grade of elementary school

TOKUNAGA Mai^{*1}, FUJIKAMI Mayumi

(Received September 30, 2025)

キーワード：栽培単元、思いや願いの醸成、気づきの質、観察カードの工夫

はじめに

国立教育政策研究所（2025）による「令和4年度学習指導要領実施状況調査教科等別分析と改善点（小学校生活【質問調査】）」における「各内容に対する教師の意識」に関する調査結果の概要によると、「児童の興味・関心のもちやすい」という回答の割合が90%以上の内容が7つあるが、その中の1つとして、内容（7）「動植物の飼育・栽培」の内容も挙げられている（p. 小生1）。この調査において、「内容（7）『動植物の育つ場所、変化や成長の様子などに関心をもって働き掛けながら、生き物への親しみをもち、大切にしようとする』について、『児童が興味・関心をもちやすい』という回答の割合は94.0%、『児童が身に付けやすい』という回答の割合は85.3%」（p. 小生5）となっている。このことから、子どもたちにとって自分ごととして対象と向き合いやすく、生活科で獲得を目指す資質・能力や見方・考え方を手に入れやすいと感じている教師が多いことが分かる。

国立教育政策研究所（2025）によると、「質問（4）『動物や植物の関わりが深まるよう継続的な飼育・栽培活動を行っている』については、肯定的な回答の割合は、88.9%」（p. 小生3）であり、「そのうち、『そうしている』は、41.0%、『どちらかといえがそうしている』は、47.9%」（p. 小生3）であった。割合を見ると、約90%が肯定的な回答をしているため問題がないように思われるが、国立教育政策研究所（2025）によると、『学習指導要領実施状況調査（平成24年度）』と比較すると、肯定的な回答は、1.2ポイント減少（p. 小生3）しており、「特に、『そうしている』は、8.3ポイント減少している」（p. 小生3）という状況である。

『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説生活編』において、生活科における学習過程について、「①思いや願いをもつ」「②活動や体験をする」「③感じる・考える」「④表現する・行為する（伝え合う・振り返る）」（文部科学省、2018、p.90）を「基本にして、単元にふさわしい展開をつくることが重要である」（文部科学省、2018、p.90）ことが示されている。栽培に関わる単元は、長期に渡り、繰り返し対象と向き合い続けていくことが求められる。しかし、コロナ禍が影響しているかとは思われるが、「令和4年度学習指導要領実施状況調査教科等別分析と改善点（小学校生活【質問調査】）」の教師対象の質問（4）に対する回答において、「そうしている」が約10%減少しているという結果は、生活科の学びにおいて求められている気づきの質の高まりを保障していく単元デザインとなっているのかどうかについては、気がかりな点である。これは、今後の生活科の取組を考えていく上での懸念材料であると考えられる。

松本・木村・高多（2019）によるコロナ禍前の栽培単元「わたしのはたけの本づくり」の実践をもとにした研究では、子どもたちがそれぞれ野菜と向き合ってきたことをもとに、自分で本の題名を決定して本づく

*1 山口大学教育学部附属光義務教育学校前期課程

りに取り組んでいる。子どもたちが作成した本の題名に着目する (p. 55) と、「私の…」 「僕の…」 という題名を付けている子どもが 29 人中 13 人 [約 45%] おり、長期間で野菜と関わり続け、「自分の野菜」、「自分が世話をしたからこそ成長した野菜」という意識をもっていることが伝わってくるものが多い。その他は、「一生懸命育てた…」 「私の大好きな…」 「頑張った…」 「きれいな…」 等 (p. 55) というように、自分が野菜と関わって得た感情を題名にしている子どもが 29 人中 8 人 [約 30%] いる。このことから、長期に渡る野菜との関わりが、子どもたちに多くの情意的な気づきを促していくことが分かる。情意的な気づきは、子どもたちが主体的に学びに向かっていく原動力となり、気づきの質の高まりに大いに影響していく。

国立教育政策研究所 (2025) が示した「今回の調査結果の成果と課題を踏まえた指導上の改善点としても、「今後も引き続き、学習対象への興味・関心を引き出す環境構成や活動への誘いかけに配慮しながら、資質・能力を着実に身に付けられるように指導の充実を図ることが重要である」 (p. 小生 8) が挙げられており、今一度、子どもたちが、主体的に対象と関わり続け、気づきの質を高めていくことを促していく単元デザインや手立てを模索していく必要がある。

1. 研究の目的

生活科は、「自立し生活を豊かにしていくための資質・能力」 (文部科学省、2018、p. 10) を育成する教科である。本研究においては、「自立し生活を豊かにしていく子ども」を「生活科の学びの実生活に生かし、よりよい生活を創造していく子ども」と定義し、研究を進めていく。子どもたちが自分自身や身近な人々、社会及び自然が一層大切な存在になって、日々の生活が楽しく充実したり、夢や希望が膨らんだりするような単元構成にしていきたいと考えた。例えば、栽培単元においては、繰り返し対象と関わり、世話を続けていく過程の中で、「ミニトマトの実の赤ちゃんがとってもかわいいな」というように、野菜が子どもにとって身近な存在かつ、大切な存在となり、単元の終わりには、「おうちでも、別の野菜を育ててみたいな」という子どもの姿を生み出していきたいと考えた。

『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説生活編』によると、「児童が身近な人々、社会及び自然と直接関わる活動や体験を重視し、児童が自分の思いや願いを生かし、主体的に活動することができるようにするとともに、そうした活動の楽しさや満足感、達成感を実感できるようにする」 (文部科学省、2018、p. 9)、「児童が身近な人々、社会及び自然と直接関わる中で、それらについて気付くことができるようにするとともに、そこに映し出される自分自身や自分の生活について気付くことができるようにする」 (文部科学省、2018、p. 9) とあり、「子どもの思いや願いを生むこと」「気づきの質を高めること」を目指す手立てを行っていくこととした。本研究では、この 2 つを目指したワークシート (観察カード・野菜情報カード等) やそれを用いた表現物を用いる効果について明らかにすることを目的とする。



図 1 自立し生活を豊かにする子どもを生み出すために

2. 研究の方法

本研究においては、図2のように活動と表現を繰り返し、目指す子どもの姿に向かっていく流れを生み出すためのワークシートを作成した。図3に、そのワークシートの中でも主に活用して行った観察カードについての工夫点とその意図を示す。さらに、蓄積してきたワークシートを本として綴る活動も設定し、子どもたちが、向き合っている野菜の成長や変容、自分の野菜へ関わり方の変容等に気付くことができるようにしていくこととした。なお、本研究においては、図4のように、活動と表現を繰り返しながら、気づきの質を高めていくことができるようにしていきたいと考えた。

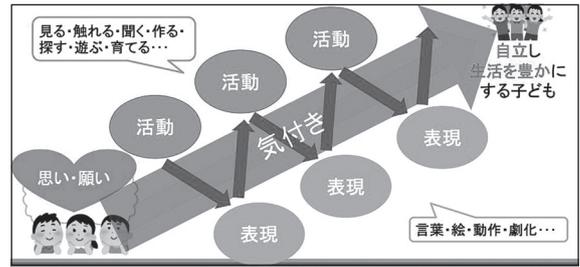


図2 活動と表現を繰り返し、目指す子どもの姿に向かう流れ

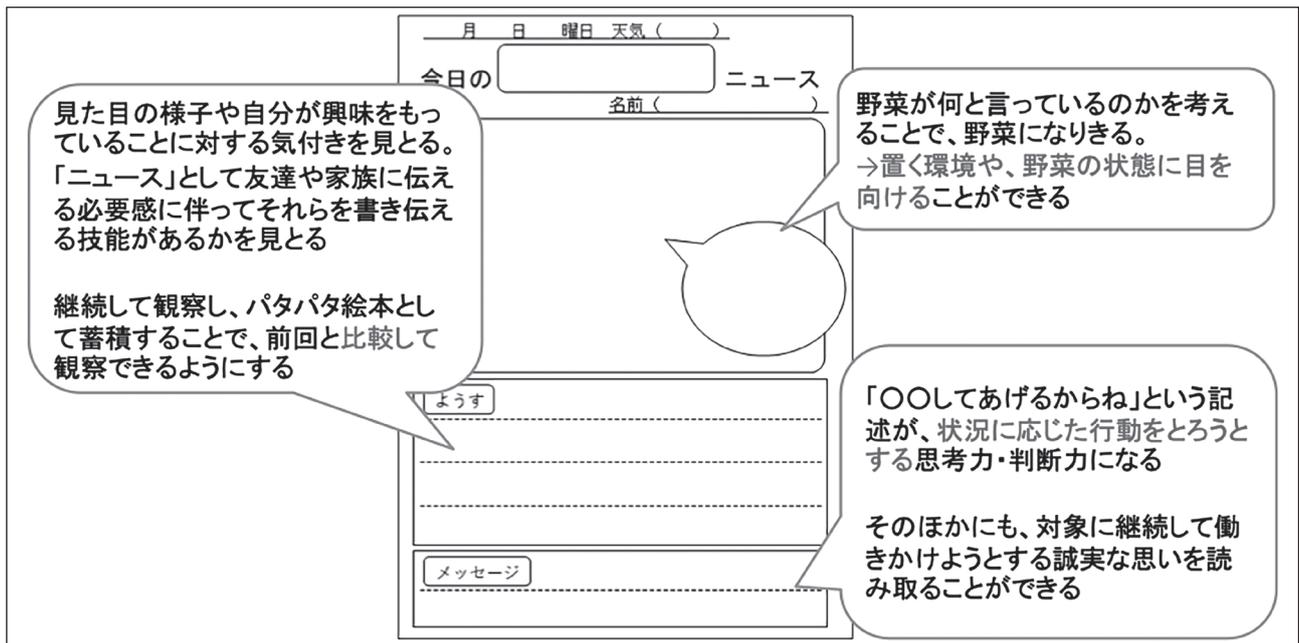


図3 ワークシート（観察カード）の工夫とその意図

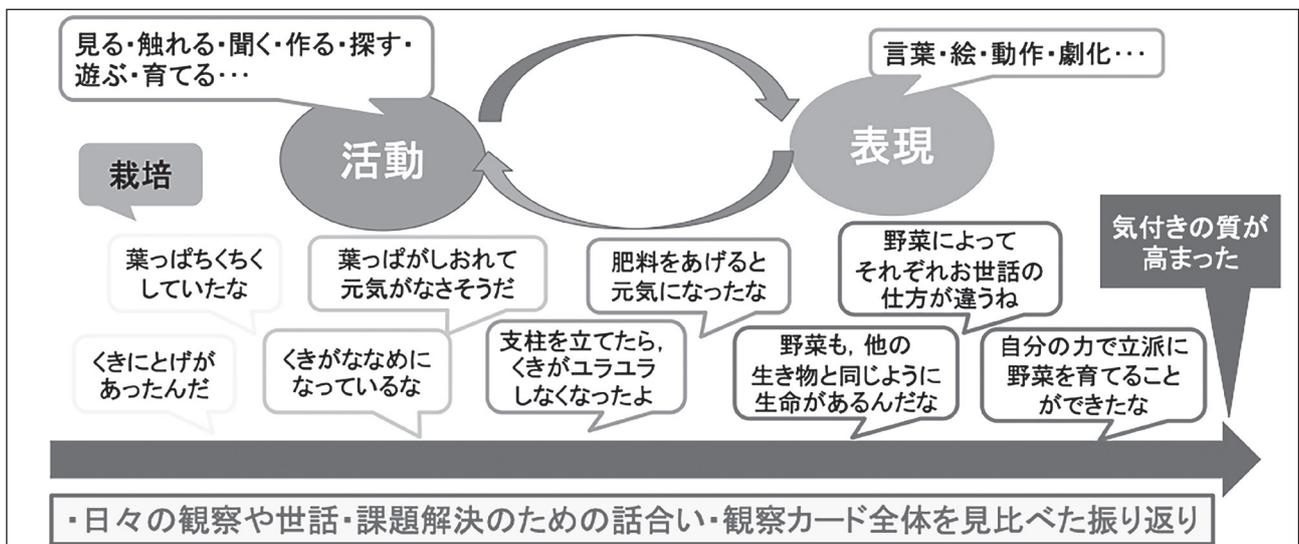


図4 栽培单元において気づきの質を高めていく子どもの姿の例

3. 研究の実際

3-1 単元名と目標

単元名は、「とまちゃんとわたしの成長ものがたり～ぐんぐんそだて わたしの野菜い～」であり、内容「(7) 動植物の飼育・栽培」に関わる単元である。子どもたちは、第1学年で実施した単元「きれいにさいてね」において、アサガオを育てたり観察したりする活動を行っている。そこでは、植物が時間をかけて変化し成長していることに気付き、植物に親しみをもち大切に育てたいという意欲をもつことができた。しかし、それぞれの植物がもつ特徴や成長の様子に応じた世話の仕方について考えたり、植物を世話している自分自身の成長や心持ちの変容に気付いたりするまでには至っていない。そこで、本単元では、野菜の栽培活動を通して、野菜の特徴や成長の様子に関心をもって働きかけ、野菜には生命があり、それぞれに応じた世話の仕方があることや野菜を頑張っている自分自身の成長に気付き、野菜への親しみをもち、植物とともによりよく生活していこうとする姿を生み出すことを目指すこととした。

3-2 単元「とまちゃんとわたしの 成長ものがたり」について

本単元は、野菜との日々の関わりの中で、植物が生命をもっていることや成長していることに気付くことで、野菜に親しみをもち、大切にしようとするようになることを行っていくことをねらう。ここでは、野菜に愛着をもって接するとともに、世話をする楽しさや喜びを味わいながら、野菜に関心をもって働きかけ、栽培活動を充実させることが大切であると考えた。そこで、成長の様子について交流したり、ワークシートに表現したりする活動を設定した。そうすることで、子どもは、野菜の世話の仕方を自ら工夫し、頑張った自分、植物に優しく接することができた自分自身に気付いていくのではないかと考えた。

「とまちゃん」とは、野菜全ての総称であり、アサガオをこれまで育てていた鉢に、一人ひとりが好きな野菜を選択して植えた。さらに、もう一つ育てていきたい野菜を選択し、それは畑に植えることとした。畑のスペースの関係で、2人で一つの野菜を選択して、協働して育てることとした。

3-3 単元計画

単元は総時数 15 時間で、表 1 のような単元計画で実践した。

表 1 単元計画

第一次	育てたい植物を決め、栽培の準備を行う	③
第二次	野菜を観察し、野菜に応じて世話の仕方を工夫する	⑤
第三次	野菜の成長の様子や世話の仕方を交流する	④
第四次	野菜を収穫し、栽培活動を振り返る	③

3-4 野菜を植えるまでの子どもたちの思いや願いを生むための活動の工夫

子どもたちの思いや願いを生むために、実際に野菜に触る体験や野菜に関わる書籍をもとに栽培をイメージする活動、これまでの栽培経験を伝え合う活動、調べたことを伝え合う活動を設定した。このような活動の後には、栄養教諭と協働して、スナップエンドウのすじとり体験を実施した。子どもたちは、「見て見て！こんなに大きいスナップエンドウがあるよ」「さっきより上手にすじをとることができたよ」等という会話をしながら活動に取り組み、その日の給食としてスナップエンドウが出された時には、給食をつくる過程に携われたことに対する喜びを感じ、自己有用感をもっていくとともに、自分たちも野菜を育ててみたいという思いや願いをもっていった。その後、子どもたちは「○○ちゃん（野菜）のためにふかふかな土をつくってあげたいな」という思いや願いをもとにして、畑の草抜きや土づくりを行っていった。その後、野菜について調べたり、話し合ったりする活動を設定した。

3-5 子どもたちのワークシート（観察カード）に書かれた気付きをもとにした「やさい会ぎ」の設定

子どもたちは野菜と繰り返し関わり、世話をする過程の中で、多くの問題と向き合うこととなった。例えば、図 5 にあるように、ワークシート（観察カード）の野菜の気持ちを記述する吹き出しに、「あぶらむし

がきたぞ」「たべられちゃったよう！！やだよ！！」というように、野菜になりきって置かれた状況をとらえていき、「ようす」の欄に、自分の視点からの気づきを記述することで、自分の野菜に困ったことが生じていっていることに気付いていった。ワークシート（観察カード）の「メッセージ」の欄には、育てている野菜へ向けた言葉を記述するようになっている。図5のワークシート（観察カード）においては、「あぶら虫にまけず大きくなってね。」「水をちゃんとやるね。食べられないようにがんばれ。」というように、野菜の気持ちや「ようす」をもとにして、野菜を応援する気持ちや自分ができることをしていこうという思いや願い、決意等が表現されている。

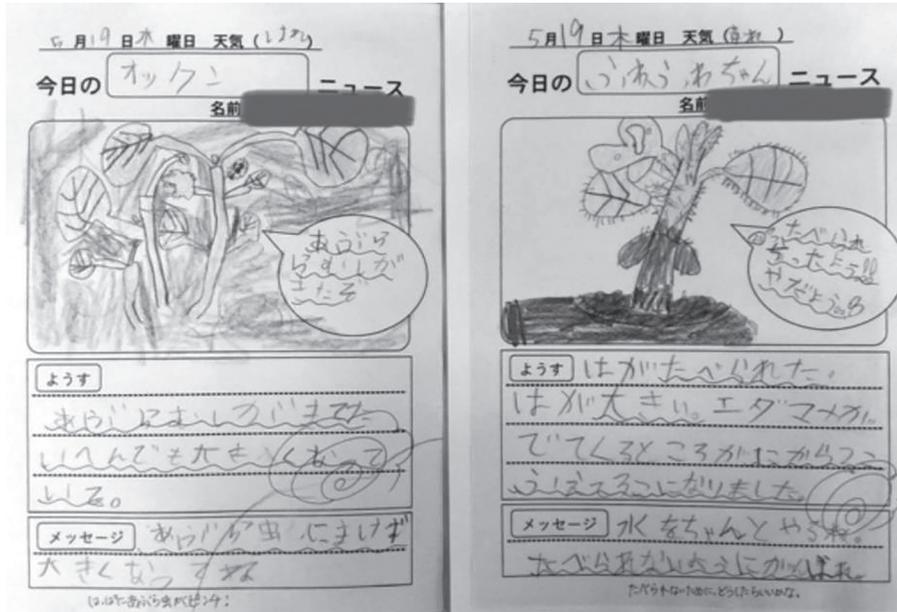


図5 問題が起きた際のワークシート（観察カード）

図5のワークシート（観察カード）を記述した2人の子どもが育てている野菜が抱えた問題は同じであるが、一人ひとりが育てたい野菜を選択しているため、それぞれの野菜が抱えている問題は異なったり、成長の度合いによって問題が起こるタイミングも異なったりしてくる。しかし、現在の野菜の状況から多くの問題が生じていくことが予想されたため、子どもたち一人ひとりが野菜が抱えている問題について挙げ、それにどのように対応していったらよいか話し合う「やさい会ぎ」を設定した。ここで話し合うことは、「やさいを元気にするにはどうすればよいか」ということである。図6は、「やさい会ぎ」で挙げた問題と子どもたちなりに考えた対策である。

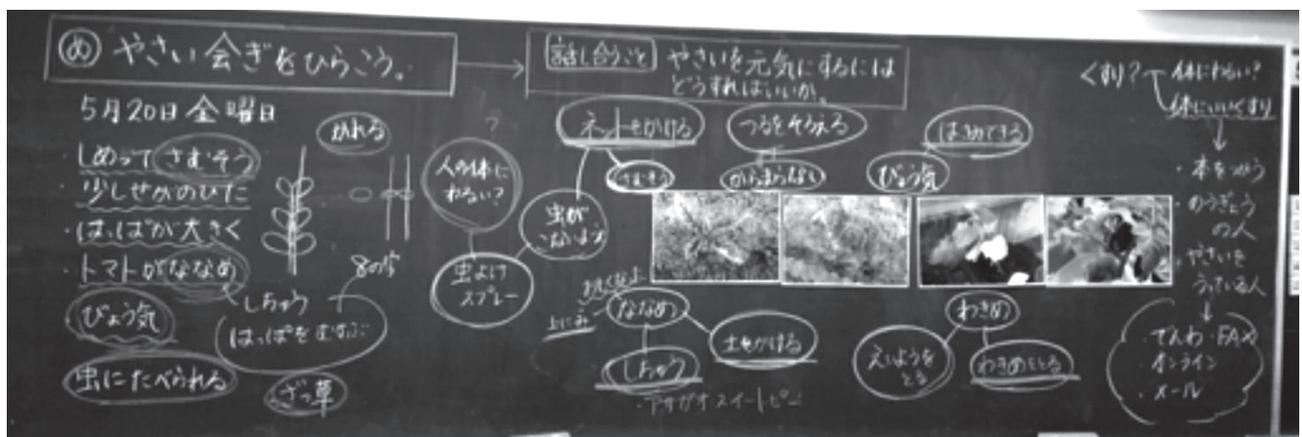


図6 「やさい会ぎ」の板書

「やさい会ぎ」の後には、図7のようなワークシートを用いて、話し合ったことをもとにして、自分の野菜が置かれた状況にどのように対応するとよいか考え、記述する時間を設定した。子どもたちは、授業時間内だけでなく、毎日水やりする際に、友達と交流したり、水やり以外の時間にもワークシート（観察カード）に記録したりしている。毎日関わっているからこそ、特に畑では協働して野菜を育てているということもあり、授業時間内だけでなく、そこで起きている問題に対して、友達と共に対応していった。適切なタイミングで、「やさい会ぎ」を設定することで、その時には自分の野菜には関係のないように思われた対応策も、状況が変われば必要な対策となることに気付いていき、子どもたちは自ら対応しようと動き出したのではないかと考える。図8にあるように、子どもたちの世話の仕方が野菜にとって適切なものへと変化していている。また、「たくさん水やりするから大きくなってね」という記述を見ても分かるように、手を掛けたぶんだけ収穫への期待感が高まっていっていることが分かる。

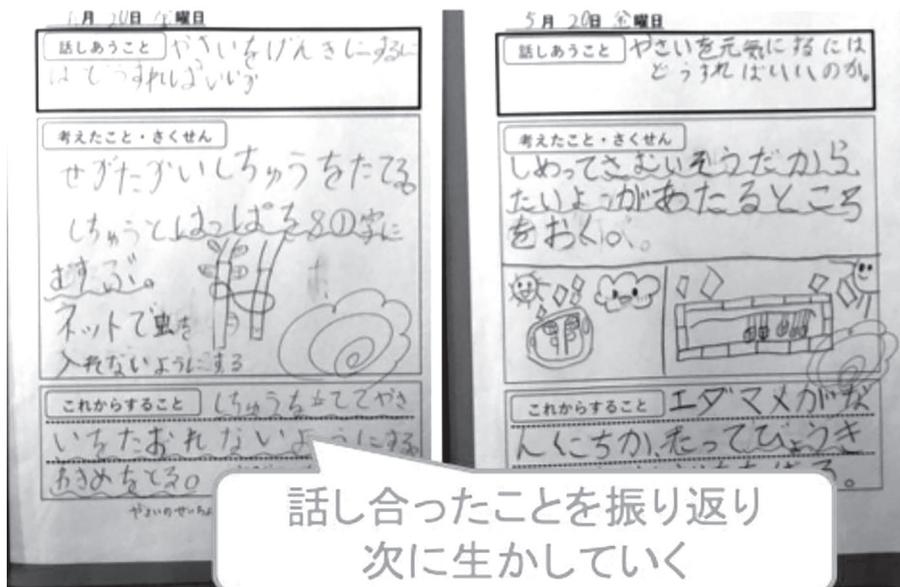


図7 話し合い後のワークシート

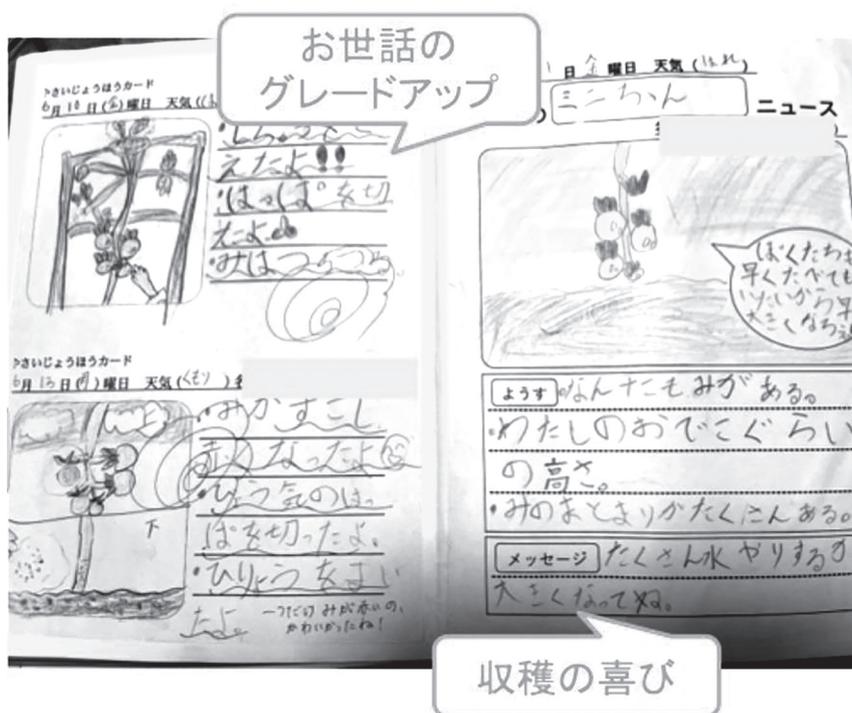


図8 観察や振り返りを繰り返し、気付きの質や活動の質を高めていく子どもの記述

3-6 長期間野菜と関わってきた自分自身の成長について見つめる活動の設定

図9のワークシート（観察カード）の吹き出しやその他の記述を見ると、世話をし続ける中で、多くのミニトマトを収穫してきた喜びを感じていることや、黄緑色だけ少し赤みを帯びてきたミニトマトを見て、収穫を待ち遠しく思っていることを見取ることができる。吹き出しの「いっぱいそだててくれてありがとう」という記述からは、これまで長期間ミニトマトと向き合い続けたことによる自己肯定感の高まりを見取ることができた。

このようなワークシートによる振り返りを繰り返すことで、単元の終末においては、図10のワークシートのように、ミニトマトと自分自身の成長について見つめるための手がかりが蓄積されていっていた。図10のワークシートの「ミニちゃんのここがすごい！ここがかわいい！」には、「毎日しゅうかくできる」とミニトマトの特徴の一つが記述されていた。また、「ミニちゃんの世話で、これがんばったよ！これできたよ！」には、「水やりを毎日やったり、日当たりのいいところにもっていった」と、自分がミニトマトに対して行った工夫が記述されており、毎日継続してミニトマトと向き合ってきたことや、野菜をさらに元気にする方法を考える「やさい会ぎ」等で見出した作戦を実行してきていることが分かる。今後生かしたいことを記述する欄には、「いきものやしよくぶつにやさしくしたり、いのちを大じにすること」、ミニちゃんへのメッセージを記述する欄には、「元気においしくせいちょうしてくれて、ありがとう。またなにかそだてるときもみずやりをかかせ（さ）ずにやろうと思うよ。」とある。このことから、自分がミニトマトを大切に思い、世話を欠かさずに育ててきたからこそ、多くの実りを得ることができたことに喜びを感じるとともに、自分が働きかけたことで、多くの感情や気づきをミニトマトから得たことを自覚していることがうかがわれる。



図9 野菜の視点から自分が世話をし続けてきたことととらえる子どものワークシート（観察カード）の吹き出し

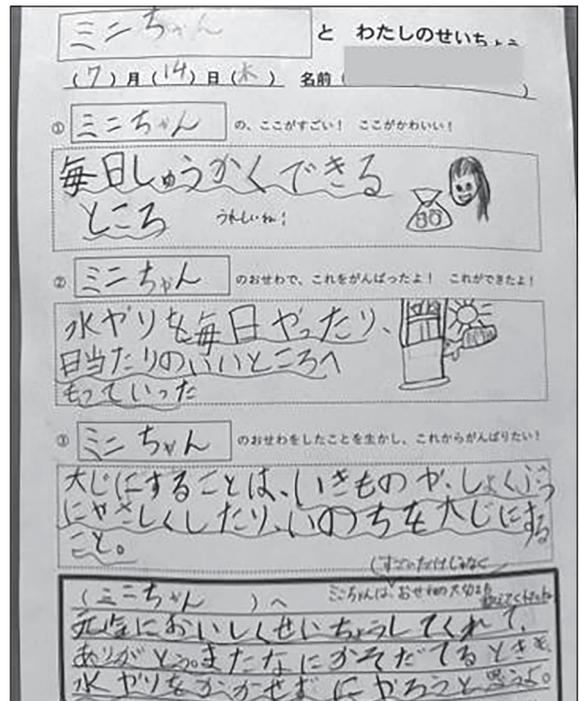


図10 野菜と自分の成長について振り返るワークシート

4. 総括

ワークシート（観察カード）やそれを活用した表現物を活用する効果について述べる。

野菜になりきるという「吹き出し」の効果としては、図11を見ても分かるように、世話をしている野菜の視点から野菜の今の様子をとらえることにつながるとともに、野菜を命や心のある存在としてより身近に感じ、野菜と気持ちを通い合わせていくことにつながる効果があったと考える。それに加え、「ようす」という欄は、自分の視点から野菜の成長や置かれた状況をとらえていくことにつながっている。「野菜になりきる」という野菜に同化した視点と、「ようす」や「メッセージ」という自分の視点という2つの視点から野

査】), p. 小生1, p. 小生3, p. 小生5, p. 小生8, 2025. https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shido_r04/pdf/4_11_r4bunseki_seikatsu.pdf (2025.9.7 確認)

徳永真衣：「とまちゃんとわたしの成長ものがたり〜ぐんぐんそだて わたしの野さい〜」, 示範授業指導案 (令和4年5月30日), 2022.

徳永真衣：「第2回授業作り研修会 (生活科) 資料」, 令和4年度山口大学教育学部附属光小学校オンライン開催第2回授業づくり研修会資料, 2022.

松本謙一・木村元威・高多利明：「生活科2年間の栽培単元をどのようにデザインするか―“自分への気付き”を重視した第2学年「わたしのはたけの本づくり」の実践を中心に―」, 金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要第11号, 2019.

文部科学省：小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説生活編, 東洋館出版社, p. 9, p.10, p.90, 2018.